

## 海外薬学実習を終えて

薬学部 5 年

今回の研修では、日本とアメリカの教育制度や医療現場での薬剤師の役割について、様々な違いを見ることができた。

教育制度について、アメリカでは日本よりも臨床を意識した教育が早い段階からされており、授業内容もガイドラインを中心として症例も多く扱いながら一つの疾患について集中的に学ぶことができる。日本では基本的にガイドラインを意識して見るようになるのは臨床の現場に出てからになるため、こういった場合にどのような治療を行うのかということ詳しく考えられるようになるまで時間がかかってしまう。しかし、アメリカのように早い段階からガイドラインや症例に触れておくことができれば臨床に出てすぐ活躍している薬剤師になれるのではないかと思った。また、日本では実務実習で現場を経験するのは病院と薬局合わせて 22 週間となっているが、アメリカではさらに長期間実習が行われるため、学生の内にたくさんの経験を積むことができ、就職後にも活かせる部分が多くあると思った。

医療現場での薬剤師の働きとしては、日本よりも密接に患者さんと薬剤師が関わっている環境であると感じた。その理由として、アメリカは日本よりも医療保険制度がしっかりとしていないことが特に関わっているのではないかと思う。薬局では常に患者さんに近い位置で薬剤師が業務を行っていたり、日本では病院でしかできないような HbA1c や PT/INR の検査やその検査結果に基づいた処方変更をしたり、リフィル処方箋のシステム、市販薬が充実していることなど、できるだけ病院に行かなくて済むように患者さんの負担を減らすための取り組みが為されていた。また、MTM Call Center や ICUBA Call Center のような日本にはないシステムにより、患者さんが加入している保険に合わせた薬についての相談にも対応している。これらのことから、アメリカの薬剤師は非常に多くの知識量も求められていると感じた。

研修に参加して、日本とアメリカの様々な違いを見ることができ、それぞれの良い部分と悪い部分について考えることができた。国民皆保険や実務実習を通して重要だと感じたお薬手帳などの薬歴を確認するためのシステムなど、日本の良い部分についても再認識できた。今回、他国の薬学の教育法や医療システムについて学ぶことができたことは良い経験となった。